

インド・ブータン農産物物流視察 ③

コールドチェーンの地図をゼロから描く



シンゲールで太陽光発電・蓄電小型定温倉庫建設

川崎陸送が西ベンガル州政府から、産直マーケット「クリシヤック・バザール」内の土地の提供の申し出を受けたのは2015年の11月。その後、17年7月にムンバイに所在する休眠会社（後にKawasaki Solar Warehousing = KSWに社名変更）を買取り、同10月に「インド国太陽光発電・蓄電小型定温倉庫活用による西ベンガル州農産物流通効率化普及・実証事業業務委託契約」をJICA（国際協力機構）と締結、建設した定温倉庫が今年1月に竣工した。

シンゲールにある「クリシヤック・バザール」内に定温倉庫建設用の土地を西ベンガル州から無償で借り受けた。バザールに持ち込まれた農産物を翌日の出荷まで保管、または倉庫内で選果作業など流通加工を行う目的で定温倉庫を建設。鮮度維持やコールドチェーンの普及により農民の所得拡大に貢献するだけでなく、農民に対し流通加工や倉庫の基本的なメンテナンスについての教育を行う狙いもある。

この第1号倉庫はJICAの実証事業という位置付けで、いわば「ショールーム」。コンビニサイズの定温倉庫とバッテリー室（合計200㎡）で構成される。屋上設置の太陽光パネルによる発電で18〜22℃の定温で



定温倉庫での流通加工の様子

の空調を実現。リサイクル可能な鉛電池で昼間に充電し、蓄電した電力により夜間も含めて24時間の温度管理を行う。これにより電気代はただで、11月末現在、故障はゼロだという。

18℃〜22℃は農産物にとって最適な温度とはいえないが、高温の環境下に野菜を放置するよりはマシだ。カビ対策として、高湿度による結露の発生を予防する漆喰や、壁を保護して庫内空氣の通り道をつくり、湿気が滞るのを防ぐ荷摺りを採用し差別化を図っている。「現地にはメンナンス人材がない。ハイテクよりも、中テクの方がなじみやすい」と樋口恵一社長は指摘する。

バナナの葉でパッケージ、富裕層が注目

定温倉庫の活用により、農産物を今までより高く売ることができるといふ。KSWではスフ

アール・バングラの農家から直接野菜を買取り、流通加工を施した「プレミアム野菜」の販売を開始。同農家からの集配用にTOTO（小型電動トラック）も導入した。倉庫では7人の女性のパートが流通加工に従事。7月末から11月末にかけてコルカタ市内のスーパ〖「Big Bazaar」でバナナの葉で包装した野菜の販売実験を実施した。タイやベトナムでプラスチックごみ削減のためバナナの包装が行われており、それをヒントにしたものだ。インドでも厳しくなっているプラ規制にもマッチする。

定温倉庫近隣のバナナ農家から葉を調達し、倉庫内でパートが野菜を選果し磨き、パッケージングする。「Big Bazaar」の店舗の販売コーナーはPOPで飾りつけている。視察中、パッケージ野菜を手にとった主婦は「とてもいいアイデアね」と満足気だった。夫はアクセントチュアに勤務し、現地の富裕層らしい。

1月からは別のスーパーでの販売オフアームも来ているという。7人のパートは西ベンガル州内に新倉庫を建設する際に、流通加工の指導員としての活躍が期待されている。



集配用のTOTO